作成日：2024 年 5 月
作成者：藤森　弘

視察報告書

所属会派	おかや未来研究室	氏　名	藤森　弘
視察の名称	会派「おかや未来研究室」行政視察		
日程	令和 6 年 5 月 22 日（水）14：30～16：30		
視察要点等	「道の駅さかい」を基点とする「自動運転バス」の視察（茨城県境町）		

【概要】

茨城県猿島郡境町で「道の駅さかい」を基点とする町内を定期巡回する「自動運転バス」に試乗した。

【内容】

境町は利根川沿いの「河岸（かし）の町」で鉄道の駅がない。そこで境町では交通・通商の要衝として「道の駅さかい」を地域商社が運営している。敷地内には観光案内所、物産館、レストランなどがあり、利根川の河川敷でのバーベキューやセグウェイ体験の受付所にもなっており、観光振興の拠点にもなっていた。また、友好交流協定を結んだ国頭村のアンテナショップ「沖縄県国頭町公設市場」を併設しており、ブルーシールアイスや猪豚丼など、一年中、南国・沖縄の味を楽しむことができる。全国各地の希少な醤油の展示販売なども行っており、＜地域商社＞の本拠地にもなっていた。

私たちは２班に分かれて「道の駅さかい」を基点として町内を定期巡回する「自動運転バス」に試乗した。人口減少と高齢化の時代、お年寄りが車を運転できなくなっても、技術の力で買い物や通院に困らず暮らしていける社会をつくりたい、という町長の理想を具現化する取り組みだという。

バスはフランス製の電気自動車（ＥＶ）で、時速は２０キロ未満。１１人乗りの車内にハンドルが付いた運転席はなく、車に搭載したカメラやセンサー、衛星利用測位システム（ＧＰＳ）で位置や周囲の状況を把握して、ハンドルやアクセル、ブレーキを人に代わって自動で操作し走行する。

ただし、完全無人の自動運転ではなく、オペレーターが立ったまま乗車し、ゲーム機の操作端末のようなコントローラーで交差点の通過や乗降補助などを行うので、「自動運転バス」という呼称は正

確ではなく、コントローラーによる「車内リモート運転バス」と言った方が良さそうだ。大きな窓ガラス越しに流れる古い町並みが、近未来の景色に見えた。

２系統の計１８便を毎日運行し、運賃は無料だ。５年で５億２千万円の事業費は、ふるさと納税や補助金を活用する。運行が始まった令和２年１１月以来、無事故が続いている。

信号機のある交差点を自動で通過することは難しいため、必ず止まる設定にし、オペレーターが確認して通過している。国内でレベル３、４への課題は「信号機をどう通過させるか」だという。

【感想】

岡谷市にはシルキーバスや路線バスがあるものの、地域内の公共交通インフラが弱く、便数も限定的であることから、住民の高齢化が進んでも自家用車を利用しないと移動手段がなく、なかなか高齢者が安心して運転免許の返納ができないという実情がある。

「道の駅さかい」を基点とする「自動運転バス」が、地域の活性化や市民プライドの形成に一役買っているのは間違いないのだが、財務的に現在の岡谷市では真似をしようがないが非常に残念だ。境町はふるさと納税額が6年連続で関東圏第１位であり、その額は４０数億円にも上る。自主財源の豊かさがあってこその地域活性化であり、予算の縮小均衡を名目に“人減らし”に走って地域の停滞や後退を招いている岡谷市とは雲泥の差がある。ふるさと納税戦略室の設置を提言しても聞いて聞かぬふりをしているような現状では・・・。